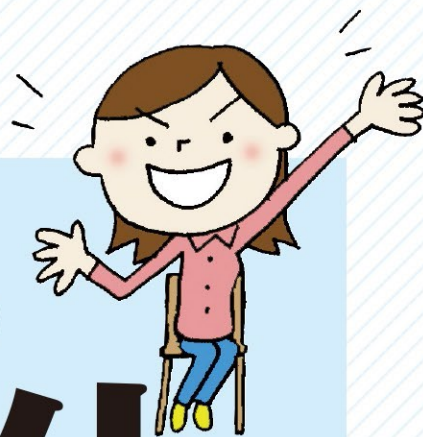


特集

チャレンジする 長大学生



基礎力を養いながら、大学から地域へ 成果だけを求めず、プロセスを重視

長崎大学には、自主的に学び、自らの力でチャレンジする学生がたくさんいます。学生担当の堀内伊吹副学長は語ります。

「『生徒』だった高校までとは異なり、大学に入ると『学生』になり、自分の意志で自らの専門（専攻）を選び、学ぶこととなります。長崎大学では、この自主的な学びの方法としてアクティブラーニングを重視しています。学生たちは能動的に学修することを通して、学問的な基礎力を身につけるとともに、論理的分析能力や批判的思考力、創造的思考力を伸ばしていきます。三年次以降はこれらの力を活かしながら、専門教育や、さらには地域に出かけてのフィールドワークやインターンシップなどで自らの学びを深めていくのです。」

大学としても、自らの力でチャレンジする学生を全面的に支援しています。その一つが「夢への架橋」チャレンジプロジェクトです。そのなかから、ながさき海援隊など、地域で活躍する団体もでてきました。また、それ以外にも大学内外のプロジェクトやコンテストへの参加を積極的に後押ししています。大学は、学生たちに成果だけを求めるのではなく、彼らの成長過程そのものを応援したいと考えています。何でもやってみなければわからないし、壁にぶちあたって初めて気づくこともあります。学生たちの主体的なチャレンジは、アクティブラーニングそのものだとも言えるでしょう。」

今回は、そんな長大学生の姿を、地域編、キャンパス編、自分自身編と分けて紹介していきます。

※「夢への架橋」チャレンジプロジェクト／学生の自主企画を長崎大学として応援するプロジェクトで、今年度で2年目。期限もテーマも条件も自由で、学部の枠にとらわれず、ゼロから築いていくチームや、すでに動き出した活動のブラッシュアップを目指すチームなどが名乗りをあげ、審査にのぞみます。採択されると資金的な援助もあります。





ながさき海援隊(水産環境科学総合研究科ほか)

海の漂着ゴミを集めて分析し環境問題を考える

あるときは、長崎市郊外で地元自治会と協力しながらの海浜清掃。またあるときは、壱岐での地域イベントで活動発表。月に一、二回は常にごくかの浜や川に足を運んで清掃や分類などの自主活動をする(ながさき海援隊は、その名の通り、長崎の海を応援する長大生チームです。代表で水産・環境科学総合研究科二年の尾崎健史さんにお話を聞きました。

「長崎は海ゴミの量が全国で一番多く清掃活動自体も行われているのですが、市民レベルでの調査活動があまりされていません。そんな状況を改善するために僕らが調査してデータをまとめ、海ゴミ問題の解決の糸口をみつければと考え、活動を続けています」。

もともと尾崎さんの学んだ水産学部には、海浜での実習や活動の後に清掃を行う伝統があります。それを全学的に広げて有意義な調査、普及活動に発展できないか?というのが活

動の動機だったといいます。「ボランティアというハードルが高いし、海浜清掃だけでは集まる人数も限られてしまうので、パーベキューやサーフィン、地引網などとドッキングさせて参加者を募ります。どうせなら楽しくやりたい。地元自治会やNPO団体などの清掃活動といっしょにやることもあります。海ゴミの調査分類は世界基準に基づいて行うため、ワークショップでそれらの情報を共有し、活動しています」。

回を重ねるごとに地域のネットワークとのつながりが深まり、誘った学生からも「環境問題に関心をもつようになつた」と声を寄せられたことも(夢への架橋)採択は二年連続で、昨年度は学長賞も受賞しました。「実は今年十月に五島で全国海ごみサミットが開催されます。そこでしっかりとした報告を行えるよう、いまデータをまとめている最中です。今後は、海外の団体と協力して活動を行いたいですね」と尾崎さん。

年々深刻化する海ゴミ問題には国境がなく、解決のゴールがどこにあるかは簡単には見えません。だからこそ、水産県長崎で学ぶ長大生が立ち上がることに大きな意義があります。「海ゴミは人のせいにしてはいけません。そのために僕らができることはやってみよう」という尾崎さんの一言が印象的でした。



海ゴミ調査時の様子。



ピースミュージアムでのギャラリートーク。



NPO/モッチの方々との海浜清掃。

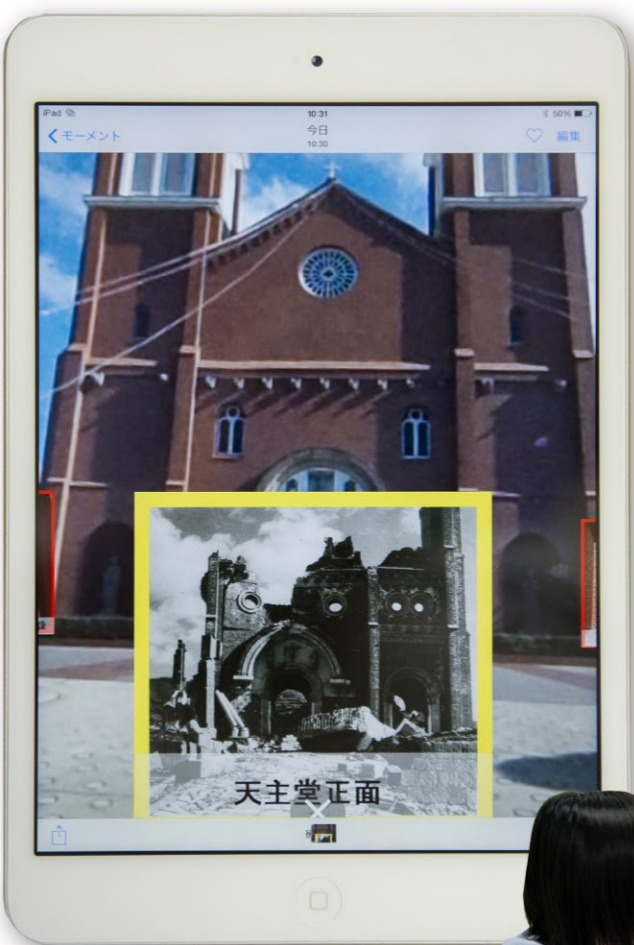


漂着ゴミは素手でさわると危険な場合があるので軍手にゴミ挟みが標準的スタイル。「挿いのオレンジのユニフォームは、目立つ方が仲間が増えるかな、と思って…」と尾崎さん(中央)。みなさん、長崎市近郊の海岸の清掃状況はだいたい頭に入っているのだそうです。

スマホを

使って学べる

平和学習教材



テキストが完成しているのは、原爆落下中心地や平和公園、被爆校舎が保存されている城山小学校など6地点。現在のパノラマ画像と、ほぼ同じ地点の被爆直後の写真がワンタッチで見比べられます。

被爆七十年を迎え、平和教育のあり方が問われている今、教育学部の学生が開発したのが、デジタル端末を利用した教材「どこでも学べる平和教育ぐるっと」。リーダーの上原和子さんのお話です。

「平和教育の地域差をなくすための教材ができないか」と思い、開発に取り組みました。タブレット端末やスマートフォンに無料アプリ「junaiio」をダウンロードし、テキストの写真にわざとパノラマ画像や被爆直後の写真が表示され、音声解説を聞くことができます。教科書だけでははリアリティを感じられない遠隔地の子どもも、タブレットで被爆地を三六〇度見渡せることで興味を示してくれます」。

上原さんたちは全体の企画を立て、被爆経験者のお話を録画

自宅で親子でも学べる



配布テキストは、そのまま読んでも被爆の実相が学べ、小さな写真に端末をかざして使うこともできます。

アンダーさん(仮名) U-30からはじめる長崎まちづくり会議(石嶺隼さん 環境科学部4年)

キャンパスを飛び出し 市民コミュニティで活躍



初めて同士でも会話が弾むような手作りクッキーなど、アイデアも楽しいですね。

長崎市の繁華街に突如出現したイベント会場。主催するのは「U-30からはじめる長崎まちづくり会議」という、三十歳以下の若者で構成するまちづくり団体で、中心スタッフとして働く石嶺隼さんの姿がありました。

「今回のテーマはまちづくり×平和。これからの時代を担う若者同士で、ピスフルな街のアイデアを考えようという試みです。僕の役割は、会場設営やワークショップのファシリテーション。まちづくりと平和とって接点がないかと思っただけですが、参加した方々の自由な意見交換のなかから、面白いアイデアも出てきました」と石嶺さん。そもそも石嶺さんは、都市デザイン関連のまちづくり団体に長く所属しており、U-30

との掛け持ちをしています。

「景観デザインの仕事を父の影響もあり、まちづくりに興味がありました。大学での学びは事例調査が中心だったので、もう少しアクティブに動いてみたいと、長崎都市・景観研究所nuriに一人で飛び込んだのが一連の活動の始まりです。nuriは斜面地の住宅を提案する展示やイベントを行うまちづくり団体で、建築家や設計士など、現役の技術者の方々に採まれてポスター作りやイベントの手伝いをしています。その動きのなかで長大卒業生でまちづくりの先輩である岩本論さんを知り、昨年U-30にも参加しています」。

nuriの所長のお話です。「学生がまちづくりに関わることは非常に重要です。というのも、大学生もまちの大切な『市民』だからです。よく、まちづくりには『若者、バカ者、よそ者』が必要といいますが、それを網羅しているのが大学生。石嶺君は沖縄出身のよそ者ですが、その若さ溢れるノリで、たまには馬鹿になるくらい積極的に活動に関わってくれれば、三つの要素を持ち合わせています。分からないこと、やりたいことなどハッキリと意思表示ができ、やる気もある。彼の将来にとっても期待しています」。

大学で学んだことを実践しつつ、社会でネットワークを広げている石嶺さん。「現場に強い」という長大生のDNAは、こんな形でも受け継がれているようです。



「長崎都市圏の総合デザイン専門誌」をコンセプトとした小冊子「ナガサキデザインニュース」も手掛けてきたnull。企画提案型の技術者集団のなかで、石嶺さんもしっかりとした存在感をアピール。



彼を「U-30」に引き入れたのは、この日コーディネーターを務めた長崎大学卒業生の岩本論さん。在学中から活発にまちづくりに関わっています。

長崎大学をはじめ、函館未来大学、神奈川工科大学、法政大学、専修大学という五つの大学

電動車いす情報化プロジェクト (工学研究科)

が参加して毎年行われている新しい発想のアプリケーションアイデアコンペ「ミライケータイプロジェクト」。そこで本年度優勝したのが、長崎大学チームの企画「電動車いす情報化プロジェクト」です。実は、昨年の漫画コンテンツを利用して外国人観光客を増やそうというアプリ「Cool Japanimation」に続いて二年連続の快挙なのです。審査をしたのはNTTデータやソフトバンクなどの企業数社と、コンペに参加した学生全員。

走行する道路の情報をビッグデータ化するアプリの開発

チームメンバーが交代で車いすに乗りながら文教キャンパス周辺の道路を走行。横断歩道や踏切の渡りやすさも重点的にチェックしました。今後は実際のユーザーを巻き込んだ展開にするのが課題だそうです。左後列から小林先生、立石拓也さん、川野智裕さん。前列 園田絵さん。



選ばれた「電動車いす情報化プロジェクト」は、電動車いすに装着した各種センサを利用して、電動車いすで走行可能な経路やスムーズな路面、逆に不便な段差や行き止まりなど、操作や走行に役に立つ情報を集めてビッグデータ化する機能を持つアプリの開発です。優勝した企画は、五大学で役割分担して一年間かけてソフトウェアの開発をするという大掛かりなものです。

企画に関わったのは大学院工学研究科、小林透教授の研究室の学生を中心とするメンバー。「頭で考えるより、まずは自分

たちで体験してみたほうがものになると思い、電動車いすを借りてキャンパスのなかや大学周辺の道路を走ってみました。「エレベーターにぶつかったり、上りより下りが怖いことを実感したり、ちょっとした傾斜でバランスを崩すことなどがわかりました」。そういった体験を重ねたうえで、不便さを解決するためにどんな情報が必要かという切り口で考えました。「これまで福祉と工学の接点は、車いすなどの操作の補助が中心でしたが、ソフトウェアと車いすの融合が新しい発想だと受け止められたようです」と皆さん。また、同じ小林研究室の一貫坂駿介さんは、車いすにカメラ

を取り付けて撮影し、その画像が簡単に更新できるストリートビューのようなシステムを研究中。どちらも車いす利用者が情報の使い手だけでなく発信する側になることで、日常生活のモチベーションアップにもつながりそうです。「ビッグデータが

オープンになるにしたがつて、人にとって役に立つ情報を抜き出す技術や知識のニーズが急速に高まっています。しかしIT業界ではシステムを構築する人が足りません。今後は自由な発想を形にしていけるエンジニアを育成していきます」と小林先生。



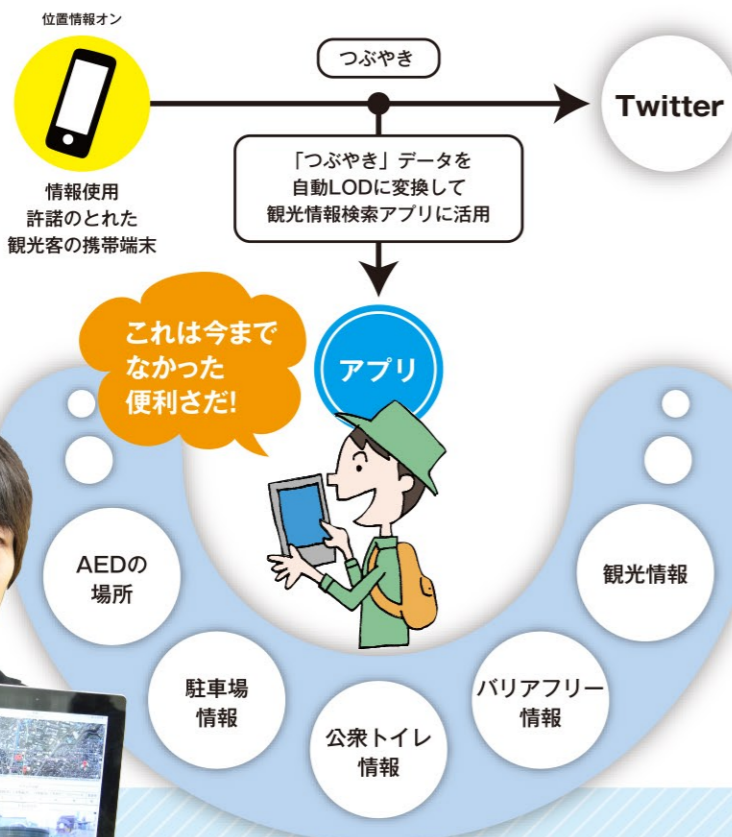
LODと観光情報のリンク(工学研究科 磯野祐太さん)

施設情報や観光地でのつぶやきを有効利用

この「ミライケータイプロジェクト」の昨年度の優勝チームの中心でもあった磯野祐太さんは、現在、小林透教授の元で別のプロジェクトを進めており、先日地元紙で大きく紹介されました。「人に役立つ既存のデータをLOD(Linked Open Data)に変換して、長崎県内の観光情報の検索アプリとつなげようというシステムです。手元のスマートフォンやタブレット端末で呼び出した最新マップから、AED(自動体外

式除細動器)が設置してある場所の情報を入手したり、公衆トイレの情報を調べたりすることが出来ます。例えば、そのトイレに駐車場があるかどうか、バリアフリーな手すりの位置などの条件からも検索できます。本システムは、コンピュータがデータの意味を理解できるセマンティックWeb技術により構築されているため、必要な条件に合わせ、しかも更新された最新の情報を入手できます」。

そのほか、観光地や映画のロケ地を実際に訪れた外国人観光客が自国語でつぶやいた言葉が、本国で長崎や映画に興味を持つ検索した人の画面にも現れるしくみも面白い! 軽々と言語の壁を越えるデジタルデータの優位性が生き、インバウンドにも活用できます。「長崎は他県と比べて観光のポテンシャルが高く、また行政の方々も協力的なので、いろいろな可能性が考えられます」と磯野さん。今後は防災分野などにも応用が広がります。



ながさきビッグデータ研究会でも発表した磯野さん。県内でも初めてのシステム。

『せっけん王子』で手洗い

「でんでらりゅうばでくるばつてんりつ」長崎のわらべ歌に合わせて指の間や爪の先まで石鹸でゴシゴシ。子どもたちに正しい手洗いの方法を教える出前教室が、医歯薬学総合研究科の大学院生たちによって行われています。実施するのは「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム」の学生の皆さん。代表の吉原圭亮さんのお話です。

「みんな正しい手洗いは頭でわかっていても、実際にはいいかげんなもの。しかし感染症予防の基本中の基本なのです。それを学んできた僕らが子どもたちに直接教えることで、社会に還元できるのではないかと考えました」。

手洗い教室では、まず、いつものように洗わせて、特殊な蛍光塗料で汚れを浮き上がらせませす。「うえーまだ汚い！」とどよめく子どもたち。かぶりものをした「せっけん王子」が手洗いクイズを出題、最後は歌に合わせて正しい方法を実践というワークショップ形式。当初は手弁当たったものの、塗料や準備に費用がかかることから(夢の架橋)に応募して採択されました。



ベトナム人留学生も。長崎大学生まれの子どもプログラムも、そのうち海外に活用されることになる嬉しいですね。



夏休みに東京霞が関にある文部科学省の子どもイベントにも招かれ、長大のプログラムには400組もの親子が参加しました。

「せっけん王子」は毎回子どもたちに叩かれて壊されるので三代目なのだそう。インフルエンザが流行する季節の前に、また出前教室を計画したい、とメンバー。

みんな、いつもどんな時に手を洗うかな？

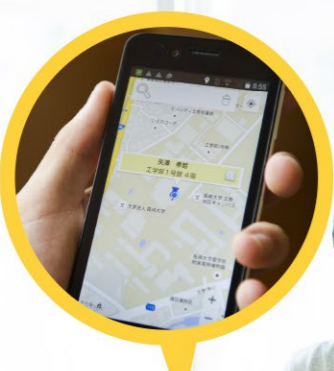


世界保健機関(WHO)推奨の手洗い手順を『でんでらりゅう』や『ようかい体操』に合わせて行えばバッチリ完璧!留学生も歌えるようにローマ字表記なのが面白いですね。



迷ったらスマホでベストアンサー

キャンパスナビアプリ開発(工学研究科ほか)



大学構内で学外の人から道を聞かれても、答えられなかった経験を持つ学生たち。そこでベストアンサーが導き出せる道案内アプリを開発中なのが、このチームです。代表は松尾幸祐さん。「モバイル端末で専用アプリをダウンロードすることでキーワードから場所を特定でき、正しく案内できるようにになります。現在は学部内の詳細な情報を足で集めつつ、地図内の緯度や経度等の座標軸を入力しています。本当は全部完成してからお披露目するのがいいのですが、逆に途中で一般公開したこと、外部の方々から地図の見やすさへの助言をもらっています」。工学部から範囲を拡大しながら試行錯誤は続きます。

「役割分担しているので、変更情報を共有しながら進めるなど、プロジェクト推進のノウハウも学んでいます」と松尾さん(中央)。他大学の女子学生も入り、プログラミングだけでなくアプリのデザインや広報も工夫しています。

全国で四〇〇チーム以上が自作車両で燃費を競う「ホンダエコマイレッジチャレンジ大会」に挑戦してみようというのがモノづくり倶楽部。代表の小原貴也さんは言います。「僕たちは、構造工学を専攻し、建築や車について、その理論や設計などを中心に学んでいます。将来はメーカーの技術職に就く可能性もあるので、在学中に理論を実践して実際にモノを作ってみたいのです」。しかしゼロからの車両製作は予想以上にハードルが高いことがわかりました。そこで、大会参加常連の企業や工業高校に見学に行きながらのディスカッションが続きます。「まずは車。そのうち飛行機などにも挑戦できればいいです」



大会では自作車両で燃費を競います。「俺らが勉強しているトラス構造と同じなのがこれ」「でも重くなるんだよ。あっちのハシゴ型フレームがいいんじゃないか?」と議論を重ねる面々。一番右が小原さん。

モノづくり倶楽部(工学研究科構造工学コース)

エコカーの

全国コンテストに

チャレンジ

長大バリアフリーマップ制作
(教育学部特別支援教育コースほか)



手分けして
車いすを押しながら
チエツク

「次の講義まで十分。キャンパス内をどう移動するのがベストか」。車いすの友人が苦悩するのを見て、バリアフリーマップの必要性を感じたという五反田明日見さん。教育学部の特別支援教育コースの四年生です。「『個』にのつての支援が社会全体に繋がっていくと学びました。ならば大学でも実践できます。キャンパスには増設された講義棟が多く、棟と棟のつなぎ目や入り口には段差が付きもの。でも、スムーズに入りやすい出入口はココという情報がマップで事前に分かれば、行動計画を立てやすい。本人も介護者も心理的な負担が減ります」。実際に構内各所で行った調査では、問題点も発



障害学生支援室の呼びかけで、経済学部や多文化社会学部の学生もボランティアで参加。エリアを手分けして学内調査を行っています。



上の月と星は「長大ハラル」のマーク。月はイスラム教、星はなんと長崎市をイメージ。考案したのは医歯薬学総合研究科の嶋田聡さん。「ハラルとは、ムスリム（イスラム教徒）にとって望ましいとされる食や生活の規約。ムスリム留学生にとって日本での食生活は大変です。そこで、生協でのハラル認定アイテムの導入に始まり、スーパリーや飲食店など、ハラルの情報を集めてウェブで共有します。最終的には長崎全体に広げられれば良いですね」。子どもの食アレルギーの診療をしていた嶋田さん。食に関する不安を払しょくし、日本でも食べることの楽しさをムスリムの留学生に味わってほしいという想



左が嶋田さん。右はチャー博士。「留学生の出身国の1/3がイスラム圏で、現在は60名ほどですが、今後増えるでしょう。学内の情報や施設整備は必要不可欠です」。



学生プレゼン大会で最優秀賞(佐原慈佳さん 薬学部1年)
「チエンジ」への
熱い想いを表現し、
自身もチエンジ!

「世界にはかえりみられない熱帯病（NTDs）が存在します。流行地域には貧困層が多く、薬が売れないことから新薬が開発されにくいのです。しかし、命に格差をつけるのはおかしいと私は思います」。ステージから観客席を見据え、強く主張する佐原慈佳さん。七月に行われた学生プレゼンテーション大会は、留学生をふくめた学生たちが英語や日本語でプレゼンをするもので、予選を勝ち抜いた六名が競う決勝大会において、佐原さんが最優秀賞を受賞しました。



想いは口にするのが大切!

「高校時代に原稿を丸暗記でプレゼンをしたのですが、まったくウケなかった苦い思い出があります。苦手意識を克服するため、NICKEYキャンパスプログラムでプレゼン力を学ぶうち、大会の存在を知りました」。中

学生をのころ、授業で発展途上の医療格差を知り、創業に関わる夢をかねなくたくて薬学部へ。大会テーマ「チエンジ」に自らの夢を重ねて「世界を変えたい」と訴えました。指導している地域教育連携・支援センターの矢野香助教のお話です。「佐原さんの場合、当初は自ら調べた病気の症状や感染経路の話が主体の研究中心の発表になっていたため、何度も構成やテーマを考



決勝のプレゼンではいすに座った状態で挑戦した佐原さん(上)。今年で2回目となる学生プレゼンテーション大会「GET(Global Entertainment Training)」は、長崎県内の10の大学と短大が連携して取り組んでいる「長崎発グローバル人材育成プログラム」の一環です。

サークルの星!

長崎大学サークルのなかでキラッと光るサークルや活躍する学生をクローズアップ!



キャプテンの人柄のおかげで自由にやれます!

全学サッカー部

天皇杯予選で決勝へ。秀総一郎さんが優秀選手賞

今年6月に行われた第95回天皇杯の県代表選手権で決勝まで進み、惜しくも三菱重工長崎に敗れた長大サッカー部。Jリーグ経験選手を含む社会人チームを相手に3対1と健闘しました。主将の濱崎翔太さん(左)のお話です。「本当は勝てた試合という実感もあり、試合後モヤモヤが残りましたね。社会人チームには技術や試合運びではかないませんが、体力的には僕らも負けない。今後の課題の残るゲームでした」。しかし、ゴールキーパーの秀総一郎さん(右)が優秀賞を獲得しました。「前半押し込まれる場面を1点で抑えたことが評価されたのでしょう。でも、Jリーグ経験者のシュートの威力や伸びはすごい! 遠くから狙ってくるので気が抜けず、いい経験になりました」と秀さん。

月曜日以外は毎日練習というサッカー部。「決勝に行けたのは今年のチームの力だけでなく、先輩たちの積み上げてきたものがあってこそ」と謙虚な一言。

夏休みこそ! 練習三昧です!



ヨット部

夏の合宿、ランチ以外は海の上

海が近い九州は全国でもヨット人口が多く、競技のレベルも高いといえます。そんななかがんばっているのが長大ヨット部。昨年は全国大会の団体戦で上位の成績を取めた選手もいます。ヨット競技はいろいろな種目がありますが、基本は一定距離の往復で、ゴール順のポイントを競うもの。艇をいかに自在に操るかが勝敗のカギを握ります。特に2人乗りの場合は、息を合わせるために長時間の練習がものを言います。

ヨットを取る艇庫が大村湾を望む時津の長崎大学臨海研修所にあり、ヨット部の夏は1日海の上なのだそう。副キャプテンの姉川郁子さんにお聞きしました。「通常は週末しか練習できないのですが、夏休みや冬休みは週5日は海に出ます。朝から夕方まで練習し、昼ごはんだけ陸に上がるという感じですね。艇庫のそばの合宿所で寝泊まりしながら1日中いっしょにいるので部員同士の絆は強まりますよ」。部員募集中で初心者でも歓迎だそうです。

剣道部女子

2年連続全国大会へ。さて今年は??

一昨年、昨年と続けて全国大会に出場している剣道部女子。支えてきたたくさんの4年生部員が卒業したことで今年度の部員は5名。試合へはフルメンバー、補欠無しで挑んでいます。今年も全国大会をめざし、週5日は体育館の武道場で汗を流す毎日。

「他大学は、全国から強い選手を引き抜いてメンバーを構成することもあります。うちの部の場合、普通に小学生や高校生のときから剣道を始めた人ばかりです。それでも、ご自身でも道場を持ちながら毎日通ってくださる石原一郎コーチ(左)の熱心なご指導や応援して下さる先輩がたのおかげで、成果は上がっています。士気は高いですよ」と主将の重野遥さん。今後の活躍も期待できそうです。メンバー募集中!



1人ひとりの役割をしっかりと果たします!

囲碁同好会

清水健吾さんが学生本因坊戦九州代表に!

第59回学生本因坊決定戦九州地区予選で勝ち抜き、九州代表となった清水健吾さん(薬学部2年)。秋田県能代市で行われた全国大会では健闘したものの、惜しくも敗れました。

入学時、大学に囲碁のサークルがなかったことから5人の仲間と同好会を立ち上げた清水さん。現在は10人が在籍しています。「囲碁は盤上に性格が出るのが面白いですね。僕は子どものころからやっていますが、負けが込んで囲碁から離れたことも何度ありました。高校になってゼロから取り組むようになって、今は後半に勝負する自分の形ができています」。

時間と闘いながら相手の手の先を読む、頭脳戦とも言われる囲碁の世界。一度、ギリギリの攻勢で勝負した対局後に頭が痛くなったことも。薬学部ではこれからハードな実験が増えてきます。「粘りや体力勝負となれば囲碁で鍛えた精神力が少しは役に立つかもしれません」。

全国では僕はまだまだ新参者です

